The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四四年九月-一二月 貪欲なる〈生〉：書くことへの執着
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 40-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57189
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼9月

・5日、最高戦争指導会議、対重慶和平条件を決定。

・10日、雲南拉孟の日本守備隊一四〇〇人玉砕。

・15日、米軍、パラオ諸島のペリリュー島、ニューギニア西方のモロタイ島へ上陸。

・22日、大本営、決戦方面をフィリピンと決定下令。

▼10月

・10日、米軍機動部隊、沖縄を空襲。那覇発空襲。

・20日、米軍、フィリピン・レイテ島に上陸。

・24日、レイテ沖海戦（連合艦隊の突入作戦失敗、戦艦「武蔵」などを失う）。

・25日、レイテ沖海戦に海軍神風特別攻撃隊が誕生、特攻攻撃開始。

▼11月

・7日、スターリン、日本を侵略国と演説。

一九四四年九月――一二月　貪欲なる〈生〉――書くことへの執着／長原しのぶ

一九四四年後半に太宰治が発表した作品は「貧の意地」（「文藝世紀」九月）、「人魚の海」（「新潮」一〇月）、『津軽』（小山書店　一一月）、「女賊」（「月刊東北」一一月）である。「二、三ケ月中に、「津軽」と「雲雀の声」が小山書店から、「新釈諸国噺」が生活社から出る。そろそろ魯迅に取りかかる。」（一九四四・八・二九　堤重久宛書簡）から窺えるように『津軽』を皮切りに三冊の著書刊行と『惜別』（一九四五・九、朝日新聞社）に繋がる準備が進められていた。

紅野謙介は太平洋戦争期に刊行された太宰の小説集の多さに着目し、「戦争に対する全面的な肯定もなければ、反戦の思想もない。あるのは、古今東西のさまざまな古典や説話、翻訳文学をもとにしたアレンジであり、人間に対する諷刺と批評に満ちた洞察と励まし、機智に富んだ卓越した語りである。出版社も読者も、情報統制によって表現が一元化されるなかで、むしろこうした太宰治の小説群を喜んで受け入れた。」（コレクション戦争と文学別巻『〈戦争と文学〉案内』）と分析する。太宰作品が世の中に受け入れられていたことは「佳日」（「改造」一九四四・一）が九月に「四つの結婚」（青柳信雄監督　東宝）として映画化され、一二月に同名作品が江東劇場で上演（水谷八重子一座）されたことからも窺えるだろう。

その一方で、当時の文学者の多くは何らかの形で戦争を支持する国策に取り込まれていた。一九三九年七月に施行された「国民徴用令」によって「多数の文化人、文学者、ジャーナリストたちが陸海軍の報道班員として「徴用」され」、「現地にあって、あるいは任務をおえての帰還後、それらの現地での体験・見聞をもとにエッセイや紀行文、ルポルタージュ、小説や評論、死などを新聞や雑誌に発表し単行本とした」（『時代別日本文学史事典現代編』一九九七・五、東京堂出版）という状況があり、井伏鱒二、小田嶽夫、高見順、阿部知二、大江賢次、火野葦平、石川達三など多くの作家がマレー、ビルマ、ボルネオ、フィリピン

・24日、B29約70機、東京を初爆撃。
・29日、空母「信濃」熊野灘で米潜水艦に雷撃され沈没。

▼12月
・13日、名古屋初空襲。
・18日、大阪初空襲。

【社会】

▼9月
・3日、高野山電鉄事故。死者一五〇人。
・30日、仏・神・キリスト教関係三〇万人の大日本戦時宗教報告会結成。

▼10月
・7日、（～9日）近畿・中部・奥羽に台風、死者行方不明一〇三人、全壊流出家屋一〇〇八戸。
・12日、渋谷駅のハチ公像が銅鉄回収のため出陣（撤去）。
・18日、兵役法施行規則改正公布、満一七歳以上を兵役に編入、一一月一日実施（満一七歳未満の志願も許可）。
・25日、金属不足で五銭・一〇銭が紙幣になる。

という南方での戦争を体験し、それを作品化している。

一九四二年五月には文学者の団結を目的とした日本文学報国会が設置され、「大東亜戦争完遂、大東亜共栄圏確立について文学者として挺身協力の方途を議し、亜細亜文学者の大使命を明かにす」（「日本学藝新聞」一九四二・一一・一五）ことを目的とする大東亜文学者大会が開催される。その第三回大会は一一月に南京で開かれ、「満州国、蒙古、中国、朝鮮、台湾それに日本の代表者たちが集まった」（『時代別日本文学史事典現代編』）という。このような状況下において、確かに太宰作品は他と一線を画していた。しかし、その背景には太宰もまた時局の流れに飲み込まれていた事実がある。「雲雀の声」は「刊行間際の十一月二十八日夜半から三十日払暁にかけて空襲で印刷工場が焼け」（赤木孝之『戦時下の太宰治』一九九四・八、武蔵野書房）、後に「パンドラの匣」（「河北新報」一九四五・一〇～一九四六・一）として発表される。さらに、「西鶴の仕事も一段落で、そろそろ魯迅に取りかからうか」（一九四四・二・二八　小田嶽夫宛書簡）と意欲を見せていた魯迅に関わる仕事（『惜別』一九四五・九、朝日新聞社）は「内閣情報局と文学報国会の依嘱」（「『惜別』あとがき」『太宰治全集』九巻　一九九八・一一、筑摩書房）であった。

「惜別」執筆において太宰の依頼された「独立親和の原則」は「一、大東亜各国は相互に自主独立を尊重し互助敦睦の実を挙げ大東亜の親和を確立す」（一九四三年一一月六日「大東亜共同宣言」）ことを表しており、特に「大東亜各国」の「自主独立」と「親和」を強く掲げている。一九四四年春、太宰が内閣情報局に提出していた企画書（「『惜別』の意図」）には、「周樹人の仙台に於ける日本人とのなつかしく美しい交遊に作者の主力を注ぐつもりであります。（…）現代の中国の若い知識人に読ませて、日本にわれらの理解者ありの感慨を抱かしめ、百発の弾丸以上の日支全面和平に効力あらしめんとの意図を存してゐます」とあり、「独立親和の還俗」という条件に十分見合う内容だったといえる。しかし、実際に発表された「惜別」については、川村湊が「「大東亜の親和」という課題に対しての答えが、

▼11月
・1日、たばこが隣組配給となる。男子一日六本。
・2日、新聞朝刊、二ページに削減（週一四ページ）。
・13日、日本野球報告会、プロ野球休止を声明、巨人は解散決定。
▼12月
・5日、年末年始、臨時列車を全廃。
・7日、日東海地方に大地震と津波（死者九九八人、家屋全壊二万六一三〇戸）。
【文化】
▼9月
・太宰治「佳日」が「四つの結婚」（青柳信雄監督　東宝）として映画化。
・28日、内閣情報局、美術展覧会取扱い要綱を発表、公募展禁止。
▼10月
・6日、二科展解散。
▼11月
・25日、文部省戦時特別美術展を上野で開催。

「支那の人を、ばかにせぬ事」。これが太宰の韜晦や逆説でないとすれば、彼はおそらく「大東亜」、アジアの人々との出会いについてまともに考えたことのないことを表しているといっても過言ではないと思える」と指摘し、「小説自体が書きにくくなっている時代において、小説創作のためなら、あらゆるチャンスを利用しようとする」（『『惜別』論」「国文学」一九九一・四、至文堂）姿勢だと述べている通り、作家として生きること、書くことを第一義的に考えた結果といえよう。

作家太宰の書くことへの執着は、「私は、私の作品とともに生きてゐる。私は、いつでも言ひたい事は、作品の中で言つてゐる。他に言ひたい事は無い。」（「自作を語る」「月刊文章」一九四〇・九）という言葉にも表れており、〈生〉きることと同義であった。田中良彦は戦時下にあっても小説や随筆の中に多く引用された聖書やキリスト教への関心の高さに注目しながら、「聖書から「感動」（「風の便り」）を得、それを作品の素材として利用することで戦時下の文学上の行きづまりを逃れたのである。作家である太宰にとって、「一日一日を」「充分に」「たつぷりと」生きることは作品を書き続けることであったろう。」（『対照・太宰治と聖書』二〇一四・六、聖公会出版）と指摘する。一九四四年に発表した作品における聖書利用は「散華」（ヨハネ一〇・二五）と「雪の夜の話」（マタイ六・一二―二三）の二作（佐古純一郎編『太宰治と聖書』一九八三・五、教文館）であるが、執筆を計画していた「惜別」にもモーゼを中心とした「出エジプト記」が引用される。「風の便り」（「文学界」一九四一・一一）には「私の今の小説（モーゼの姿を描いたもの）は、決して今の時代の人たちへの教訓として書いてゐるのではありません。私はいつでも自分触覚した感動だけを書いてゐるのです。（…）このごろ私の身辺にちつとも感動がなくなつてゐたところを聖書が救ってくれました」と記されており、「惜別」にも繋がる意識が確認できる。

厳しさを増す社会状況の中で個人的にも世の中的にも「感動」の減少を感じていた太宰は書き続ける行為によって〈生〉き続けようとしたのである。生み出された作品は太宰個

▼12月
・7日、映配、生フィルム欠乏により、七三一の映画館（約四〇％）に配給休止を宣告。
・太宰治「佳日」が江東劇場で上演。

【代表作】

▼9月
・井伏鱒二「山上陣地」（「新若人」）
・海野十三「共軛回転弾」（「新青年」）
・三好達治「兵機探玄」（「文藝春秋」）

▼10月
・石川達三「空襲奇談」（「文學報国」）
・三島由紀夫『花ざかりの森』（七丈書院　15日）

▼11月
・井伏鱒二「九百三十高地」（「少国民の友」）
・太宰治『津軽』（小山書店　15日）

▼12月
・伊藤整「父の像」（「文藝」　1日）
・竹内好『魯迅』（日本評論社）

人の〈生〉の枠を超えて多くの人々にも受け入れられる。一一月に刊行された『津軽』は、「敗戦目前という時期でもあって発刊時の評判はあまりないが、昭和十九年歳末の小山書店は、引きも切らずに続く『津軽』の注文に、思わぬ『津軽』ブームとダンディな店主小山久二郎は颯爽として肩をそびやかし、出版業界の用紙対策などの会合に、時おり顔を出しては用紙の配給不足で『津軽』の増刷ができない、との不平をぶちまけていた。」（王花亭散人「『津軽』の出版をめぐって」「太宰治3」一九八七・七、洋々社）という。戦時下という特殊な時代状況の中においても流されることなくむしろ巧みに立ち回りながら書くことに拘り、その〈生〉を貫き通す姿勢が敗戦の色濃い時期になお多くの作品を生み出したといえる。

「惜別」執筆準備にはその太宰のある種の強かさが窺える。小崎道雄が「文部省の教化局長長阿原氏」の言葉として「この戦争は思想戦であって、最後は信仰の問題であるから、宗教家の使命は重要である（…）支那では宗教の内、真に働ひてもらへるのは基督教のみ。」（「基督教研究」一九四四・九）と紹介しているように、当時の中国ではキリスト教を中心とした宗教的な働きかけが有効とされていた点は興味深い。太宰が個人的な思いの中で聖書に対峙していたことが奇しくも国家の方策と合致する面があったのである。このような状況を太宰がどれほど理解し戦略的に利用していたかは明確ではないがそれらの状況も含めて書き続ける環境に身を置き続けようとした作家太宰の姿が浮き彫りになる。終戦後、一気に世の中が変化する中で「私たちの魯迅先生が生きてゐたら、何と言はれるでせう」（「返事」「東西」一九四六・五）という言葉から「右大臣実朝」の源実朝や「駈込み訴へ」のイエスとユダへの関心と同じ地平に魯迅もまた太宰の中に存在し続けたことが確認できる。太宰は戦時下に個人の〈生〉をこそ貫こうとした作家の一人といえるだろう。